

第5回

日本医師会

赤い賞

かかりつけ医たちの奮闘

受賞者紹介



主催 日本医師会／産経新聞社

特別協賛



ジャパンワクチン株式会社

日本医師会

赤ひげ大賞

目 次

- 3 第5回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要
- 4 第5回 表彰式
- 5 皇太子殿下 お言葉
- 6 主催者挨拶 日本医師会 会長 横倉 義武
- 7 主催者挨拶 産経新聞社 代表取締役社長 熊坂 隆光
- 8 協賛社挨拶 ジャパンワクチン株式会社 代表取締役社長 寺野 伸一
- 9 表彰式・レセプション
- 10 祝辞

受賞者紹介

- 13 下田 輝一 (秋田県 山内診療所 院長)
- 18 大森 英俊 (茨城県 大森医院 院長)
- 23 明石 恒浩 (神奈川県 ザ・ブラフ・メディカル&デンタル・クリニック 院長)
- 28 大森 浩二 (京都府 大森医院 院長)
- 33 瀬戸上 健二郎 (鹿児島県 薩摩川内市下甕手打診療所 前所長)
- 38 選考講評 日本医師会 常任理事 道永 麻里
- 39 第6回「日本医師会 赤ひげ大賞」推薦概要

第5回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、公益社団法人日本医師会と産経新聞社が主催し、「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、ジャパンワクチン株式会社の特別協賛、厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジの後援の下、平成24年に創設されました。各都道府県医師会から候補者を推薦していただき、選考委員の厳正な協議を経て、第5回「日本医師会 赤ひげ大賞」の受賞者5名が決定しました。

主 催	日本医師会、産経新聞社
後 援	厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
特別協賛	ジャパンワクチン株式会社
対 象 者	病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師(ただし、現職の日医・都道府県医師会役員は除く)。
推薦方法	本賞受賞にふさわしいと思われる方(原則1名以上2名以内)を各都道府県医師会長が推薦
選考委員	羽毛田 信吾(昭和館館長、宮内庁参与) 向井 千秋 (宇宙航空研究開発機構技術参与、東京理科大学特任副学長) 山田 邦子 (タレント) 小林 光恵 (作家) 神田 裕二 (厚生労働省医政局長) 飯塚 浩彦 (産経新聞社専務取締役) 河合 雅司 (産経新聞社論説委員) 他日医役員等

第5回 表彰式



地域で献身的な医療活動に取り組む医師を顕彰する第5回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式が平成29年2月10日、皇太子殿下ご臨席の下、東京・内幸町の帝国ホテルで開かれた。

皇太子殿下は「受賞者の方々は、使命感を持って困難な条件を乗り越え、それぞれの地域にとって無くてはならない存在として活躍されていると伺っており、そのたゆみない努力と取組に心から敬意を表します」と述べられた。

日本医師会の横倉義武会長、産経新聞社の熊坂隆光社長が受賞者5人に表彰状と記念品を贈呈。長年の活動が評価された受賞者らは喜びと感謝を述べ、今後の地域医療への決意を新たにしていた。

表彰式後に行われたレセプションでは、後援する厚生労働省の塩崎恭久大臣、特別協賛であるジャパンワクチンの寺野伸一社長らが受賞者を祝福した。

皇太子殿下 お言葉



第5回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式に皆さんと共に出席できることをうれしく思います。

この赤ひげ大賞は、地域住民に寄り添いながら、病気を治すだけでなく、健康の保持・増進といった日々の暮らしを守る活動を行う、かかりつけ医に光を当て、地域医療の発展を願って設立されたと聞いております。

急速に高齢化が進む中、各地の医療現場では、離島や自然条件の厳しい土地で医師がいなかったり、都市部であっても病院が撤退したり、診療科が偏っているケースもあります。また、国際化が進む中で、経済的事情や言葉の壁により、十分な診察を受けることが困難な外国人も珍しくないと聞いています。

今回の受賞者の方々は、使命感を持ってこのような困難な条件を乗り越え、それぞれの地域にとって無くてはならない存在として活躍されていると伺っており、そのたゆみない努力と取組に心から敬意を表します。

また、本日の表彰式には、日本の医療の未来を背負う医学生の方々も出席されていると伺いました。受賞者の皆さんには、これまでの経験を次に続く若い方たちに是非伝えていただきたいと思います。

「日本医師会 赤ひげ大賞」が、地域住民の診療や健康管理に携わる医師の方々の大きな励みになり、地域医療の更なる発展につながることを期待するとともに、この賞が末永く発展していくことを心から願い、私の挨拶といたします。

日本医師会 会長
横倉 義武

本日ここに、皇太子殿下のご臨席を賜り、多くの皆様のご出席のもと、第5回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式を遂行させていただきますことは大変名誉なことであり、心から感謝申し上げます。

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、地域医療の現場で長年にわたり地域住民に寄り添い地道に尽力されている先生方を「現代の赤ひげ先生」に見立て、その功労を顕彰することを目的として、平成24年に創設したものです。

「赤ひげ大賞」という名称ですが、その由来は、山本周五郎の時代小説「赤ひげ診療譚」にあります。黒澤明監督が映画化したことでご存知の方もいらっしゃると思いますが、「赤ひげ先生」と言えば、貧しく不幸な人々に寄り添い、身を粉にして働く頼もしい医師というイメージを思い起こす方も多いのではないのでしょうか。

今回、受賞された5名の先生方はいずれも各地域において、献身的に医療活動に従事され、患者さんの信頼も厚く、まさに「現代の赤ひげ先生」と呼ぶにふさわしい方々ばかりと言えます。

この「赤ひげ先生」の实在のモデルは、江戸中期に貧民救済施設である小石川養生所で活躍した小川篁船こがわ けいせんと言われていますが、病に苦しむ人がいれば何としても助けたいというのが医療人の願いであり、医療の本質は当時も今も変わりありません。

一方、わが国では、現在、世界が経験したことのないスピードで超高齢社会を迎えています。その状況に対して、我々がどのように対応していくのか、世界的な注目が集まっていますが、そのカギは、「かかりつけ医」、つまりは身近にいて頼りになり、必要な時には専門の医療機関を紹介してくれる先生方の存在にあると確信しています。

そのため、日本医師会では、国民の皆さんに「かかりつけ医」を持つことを呼び掛けるとともに、昨年4月からは、各地域の先生方のかかりつけ医機能の維持・向上を目指して、「かかりつけ医機能研修制度」をスタートさせました。

今後も、日本医師会は、「国民の生命と健康を守る専門家集団」として、「必要とする医療が過不足なく受けられる社会づくり」を目指し、さまざまな事業活動や国への働き掛けを行って参る所存でありますが、本日お集まりの皆様方にも、ぜひ、地域住民の方々に寄り添った形で医療を展開している全国の赤ひげ先生がますます活躍できますよう、なお一層のご支援・ご協力を賜りますことをお願い申し上げます。

結びになりますが、改めまして、共催の産経新聞社、後援の厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ、特別協賛であるジャパンワクチン株式会社を始め、本事業の実施にご尽力いただきました方々に、心より御礼申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。

受賞者の先生方、本日は誠にありがとうございました。



産経新聞社
代表取締役社長
熊坂 隆光

本日ここに、皇太子殿下のご臨席を仰ぎ、第5回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式を開催できますことに、心より感謝申し上げます。また、受賞者の皆様、ならびにご家族の皆様、本日は誠にありがとうございます。

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、地域に密着し、住民の健康を支えている医師の功績を称えることを目的に、日本医師会と産経新聞社が共同で創設いたしました。受賞された皆様は、地域社会の中で多くの信頼を集め、地域住民の健康を支えてこられた方ばかりでございます。今後も、住民の皆様との深い信頼関係のもと、より良い地域社会を築いていかれることを心より願っております。

皆様ご案内の通り、わが国の成長戦略の柱の一つは、「医療分野」であります。日本の医療水準は先進各国の中でも極めて高く、だれもが安心して高度の医療を受けられる制度は世界に誇れるものであります。そして、そうした医療制度を支えているのは、地域に根差した活動を続けてこられた医師の皆様、医療関係者の皆様であります。

今回、受賞された皆様は「現代の赤ひげ先生」というにふさわしい方々でございます。日々の献身的な活動は、まさに「日本の力」といっても過言ではございません。

私ども産経新聞社は、報道機関として、日本の医療の充実、ひいては国民の健康増進の一助となるべく、これまで以上に邁進していく所存であります。

今後とも、皆様方の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げ、私からのご挨拶と致します。本日は誠にありがとうございます。



ジャパンワクチン株式会社
代表取締役社長
寺野 伸一



本日「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞されました5名の皆様には心よりお慶び申し上げます。
長年にわたり地域医療を支えてこられた過程において大変なご苦勞があったと思いますが、地域住民の皆様にとってはなくてはならない存在であり、そして今回の受賞を一番喜ばれているのも住民の皆様ではないかと思っています。
益々のご活躍を祈念申し上げます。
ジャパンワクチンは「日本医師会 赤ひげ大賞」の趣旨に賛同し、第1回から特別協賛という形でお手伝いをさせていただいております。
主催の日本医師会、産経新聞社の関係者の皆様に心より敬意を表するとともに「日本医師会 赤ひげ大賞」の益々のご発展と本日ご参集の皆様方のご健勝を心より祈念申し上げてご挨拶とさせていただきます。
本日はおめでとうございます。



5人の受賞者を中心に選考委員ら



皇太子殿下ご臨席の下、多くの関係者が出席し盛会の表彰式



お祝いのお言葉を述べられる皇太子殿下



乾杯の発声は選考委員の羽毛田信吾氏



レセプションで受賞者と歓談される皇太子殿下

厚生労働大臣

塩崎 恭久



本日は皇太子殿下のご臨席を賜る中、第5回「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞された5名の皆様に対し、改めて心からお祝いを申し上げますとともに、地域医療の現場において、ご貢献されてきた皆様の活動に深く敬意を表します。

本日受賞の皆様におきましては、地域医療の現場において、住民が安心して生活を送れるよう、地域に寄り添った活動に、日夜ご貢献いただいております。

無医村の診療所にて長年にわたり村民の健康を保持されてきた下田輝一さま、公共交通機関が乏しい地域において、在宅医療のできる環境を整備されてきた大森英俊さま、言葉のハードルにより、受診が難しい在住外国人に、多言語を駆使して丁寧な診療を実施されてきた明石恒浩さま、独居高齢者など、医療から取りこぼされている患者の在宅医療に取り組まれてきた大森浩二さま、離島において、救急医療体制などを整え、医療体制の充実と向上に尽力された瀬戸上健二郎さまと、それぞれの地域で献身的、継続的な活動をされてきたこと、改めて深く敬意を表します。

今、地域医療に求められているのは、単に病気を治すだけではなく、地域の皆様が健康面で安心して暮らせるよう、多様な人生観、価値観を有する患者の相談にのり、患者本人だけでなく、その家族全員のケアまで考えに入れて、全力を尽くされる「かかりつけ医」の存在であると思います。

本日受賞の皆様は、病気を治療するということもさることながら、患者とその家族の人生に向き合い、生活を支える全人的な医療を提供されており、まさに「かかりつけ医」としての理想的な姿と言えます。

また、現在、厚生労働省でも「我が国が目指す医療の在り方」と、それを踏まえた「医師・看護職員などの新しい働き方・確保の在り方」についてのビジョン策定のための検討会を行っており、こうした医師の働き方のビジョンを示すことによって、本日受賞された皆様に代表される「赤ひげ先生」を目指して、若い医師が気概を持って働ける医療現場の構築に資するようになりたいと考えています。

最後に、今回のご受賞を機として更に地域においてご活躍されること、また本日お集まりの皆様のますますのご健勝を祈念して、私の挨拶といたします。

厚生労働大臣政務官

馬場 成志



本日は皇太子殿下のご臨席を賜り、第5回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式が盛大に開催されることを、心からお慶び申し上げます。

はじめに、本日栄えある表彰を受けられた5名の皆様に対し、心からお祝いを申し上げます。

本日受賞の皆様は、山間部や都市部における在宅医療の実施、高齢者のニーズに合わせた診療所の有床化、巡回診療の実施に取り組まれているほか、離島における本土と遜色の無い医療の提供や、アジア周辺の在住外国人が多い地域で、英語やタガログ語などを駆使しての診療活動など、それぞれの地域で住民の健康を守るための、地道で献身的、継続的な活動をされており、改めて深く敬意を表する次第です。

厚生労働省といたしましても、本日受賞された5名の方々をはじめとする「かかりつけ医」の皆様を支えるべく、様々な施策によるサポートを実施してまいります。

2025年に目指すべき医療提供体制として、地域包括ケアの推進や在宅医療の充実を進めていくほか、へき地の診療所への医師派遣などの支援、外国人が安心・安全に日本の医療サービスを受けられるよう、外国人患者受入体制の充実や、「総合診療専門医」の推進など、新たな専門医の仕組みの導入支援などを実施してまいります。

終わりに、本事業を支えてこられた日本医師会、産経新聞社を始めとする関係者の方々に敬意を表するとともに、「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞された皆様のご活躍と、本日お集まりの皆様のご健勝を祈念して、私の挨拶といたします。

京都府医師会 会長

森 洋一



本日は第5回「日本医師会 赤ひげ大賞」に京都府医師会推薦の大森浩二先生を選出いただき、ありがとうございます。主催の日本医師会、産経新聞社、特別協賛のジャパンワクチン様、選考委員、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

受賞されました皆様、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。地域医療を担っている我々医師の大きな励みになると思いますし、うれしい限りです。

日本には奈良時代に「^{せやくいん}施薬院」という豊かな人にも貧しい人にも医療を施す皇室ゆかりの施設がありました。その後、平安時代には京都の地で、江戸時代となって「^{こいしかわようじょうしよ}小石川養生所」などで貧しい人達に医療を施すということが行われてきました。その精神は、今も我々に連綿と受け継がれ、日本医師会が定着を目指しておられる「かかりつけ医」もまさに我々医師が日常診療において住民のために活動していることの大きな証左になるものと思っています。

本日受賞された皆様は、素晴らしい医療を地域で担ってこられ、長年にわたって日々実践されてこられたから大きな成果があり、その素晴らしい成果が「日本医師会 赤ひげ大賞」として表彰されたものと思っております。これからも、我々の手本として取り組んでいかれることを期待いたします。

この「日本医師会 赤ひげ大賞」が未永く続き、多くの地域の医師達が影に日向に頑張っておられたことを知っていただき、発展していくことを祈念し、受賞者都道府県医師会を代表しての挨拶いたします。おめでとうございます。

家族とともに『看取り』を支える

山内診療所院長

下田 輝一

〔 秋田県 〕

しもだ・てるかず 山内診療所院長。昭和18年、現在の秋田県横手市生まれ。73歳。岩手医科大学大学院修了。呼吸器内科を専門に同大助手、講師を歴任し昭和54年に横手市立横手病院第1内科科長に転じる。平成2年から現職。三又へき地診療所など過疎化が進む3つの地域で、唯一の医師として地域医療に従事し、通院困難な患者のために訪問医療も行っている。



(宮川浩和撮影)



長年の信頼から安心して何でも相談

雪で作った洞の中に祭壇を設ける「かまくら」で名高い秋田県横手市は、雪深い秋田県内でも屈指の豪雪地帯。屋根までも届く、数分の高さの雪が積もること知られる。JR横手駅から車で40分ほど走った、奥羽山脈の麓にある旧山内村（現在の横手市）の三又地区は人口が約200人あまり、65歳以上の高齢者が占める比率は40%以上という小さな集落だ。秋には大根をいぶして作る漬物「いぶりがっこ」の煙が集落から立ち上り、地場で採れるサトイモやキノコを煮込んだ「いものこ汁」が名物。「土がいいから、おいしい芋がとれるんだよ」。そう話す下田輝一医師（73）は毎週火曜の午後、地区唯一の医療施設「三又へき地診療所」を訪ねる。

「先生が来る前にストーブをつけます。大雪で囲まれた方が部屋の中は温かい。『かまくら』と同じ理由です」と管理人という女性は言う。待合室には昭和時代のレトロなブラウン管テレビにじゅうたん。次第に高齢者が集まってくる。「何とだったー（その後

どうでしたか）」「大丈夫そうだね。今日はインフルエンザの注射をしておこうか」。他愛もない会話をするのが楽しみな様子だ。

下田氏は平成2年に診療所の運営を引き継いだ。患者は当時から、四半世紀以上も通い続けている人たちばかり。それぞれの病歴や家族歴は全て覚えている。「みんなこのへんに住んで歩いてくよ」「先生優しいからねえ」。バス便は1日数本しかなく一人暮らしの高齢者も多い。

「赤ひげ」だった父の背中を追って

下田氏は秋田県南部の旧大雄村（現在の横手市）で昭和18年、開業医の輝千代氏のもと、四人兄弟の長男として生まれた。幼い頃から地域医療に尽くす父の姿を見て育つ。「具合の悪くなった患者さんの家族が、夜中にやってきてドンドン戸をたたく。電話も普及していない時代なので直接、来るん

です。起きて駆け付ける父は『大変だなあ』と思ってましたよ」。

わんぱくなきかん坊で、親の言うことを聞かない「きがねわらし」だったという子供時代。父に叱られ、雪の積もった屋根に登って逃げたこともある。だが長男としての責任感から、父の後を継いで「医者にならなきゃ」と岩手医科大学に進んだ。

岩手医科大では、呼吸器アレルギーを専門とする光井庄太郎教授の研究室に入る。広島でカキの殻むきに従事する人々の間でぜんそくが多発、金づちで殻を剥ぐときにカキが発する「しぶき」が原因だと突き止めた学者だ。「温厚で好きに勉強させてくれた」光井教授の後ろ姿を追いかけて、呼吸器アレルギーを研究し、大学院へ進み博士号も取得。そのまま昭和47年に母校の大学病院の副手となり、助手、講師として勤務する。

7年ほど勤めた昭和54年頃、横手市立横手病院から「常勤医としてきてほしい」と声がかかる。旧

大雄村で診療を続けていた父も年を重ね、「白髪も増えていたし、そろそろ地元に帰ろう」と、同病院の第一内科科長に転じる。10年あまり勤めた頃、「山内村で常勤医を探している」と聞き再びの転身を決めた。赴任予定だった医師が病に倒れ、急ぎ行われた募集に応じた。横手高校に通っていた当時、山内村の村長の息子が同級生で「医者がいなくておやじが困って全国を探して歩いている」と聞いた話を思い出したからだ。

大病院の科長職に未練はなかった。その「山内診療所」を引き継いだのは平成2年。さらに奥地に入った「三又へき地診療所」と、父が守ってきた大雄村の診療所もあわせて、3カ所の地域医療を引き受けることになった。人口減少率、高齢化率ともに全国一の秋田県の中でも、とりわけ過疎化と高齢化が進んでいる地域ばかりだ。診療所に通えない80～90代の高齢者も多く、週2回のペースで、旧山内村周辺の家庭に往診に出向く。豪雪地帯で冬場は



「はい、楽にしてねー」と声をかける

ふぶき、運転が怖くなることもある。それでも「この地域では当たり前のことだから」とさりとて言う。

患者は、息子夫婦に孫、ひ孫たちに大切に见守られて暮らす女性、都市部にいる娘と離れて一人暮らしの女性、妻が施設に入った一人暮らしの男性など、事情や体調はさまざま。医療行為だけではカバーできない介護の領域も多い。

この10年ほど連携するのが、山内診療所の近くで訪問看護サービスを行う「ナースステーションふきのとう」(横手市)で、運営会社の社長は横手病院に勤務していた当時、同病院の看護婦だった高橋陽子さん(54)だ。下田氏の往診の合間を縫って訪問看護に訪れ、床ずれや栄養不良など患者の状態をチェックする。気心知れた高橋さんの仕

事は「本当に助かっている」と話す。「先生、横手病院ではきっちりした感じの方で、怒られたこともありました。今はとても優しくなりました」と高橋さん。

「納得のいく最期の迎え方を」

難しいのは人生をどう締めくくのかの「看取り」のやり方だ。在宅介護がその場所となる。「最期の迎え方は本人の意思が大事。ただ90代後半になって、寿命を無理に延命するのはどうなのか」。胃に穴を開けて水や栄養分を補給する胃ろうを、認知症の高齢者に施すことは果たして幸せなのか。点滴が打てなくなるほど体力が落ちて血管が細くなっても、生き長らえさせるのが本人の幸せなのか。家族の負担を考えながら「もしもの時」に備え、早い段階から本人と家族とじっくり話をする。長年の信頼関係がなければ成り立たない。下田氏の「自然の成り行きに任せましょう」という言葉に納得し、寿命以上の延命を望む人は少ない。

悩みの後継者だ。息子も医師だが、東京の病院で責任ある立場にあり、離れるわけにはいかない。地元医師会とも相談しながら人選を進めてもいるが、適任者はなかなか見つからない。「この1～2年、足腰が痛くなってきてね。あと何年できるかなと考える。動けるうちはずっとやっていくつもりだけど」。

息抜きは学生時代に始めたクラシックギターで、50歳になって再開し診療の合間につま弾いている。もう一つの趣味はカメラ。妻せい子さん(72)の慰労で、たまに出掛ける海外旅行で撮影する。診療所には絵はがきのように美しい、イタリアのベネチアなど海外の写真が飾られている。

(藤澤志穂子)



患者の不安を取り除くよう優しく話しかける



午後は看護婦たちと車で往診に出かける



三又へき地診療所ではストーブをつけて下田先生を待つ



拠点とする山内診療所



「体が動くうちは続けたいんだけどねえ」

患者の生き方に寄り添う医療を

大森医院院長

大森 英俊

〔 茨城県 〕

おもり・ひでとし 茨城県常陸太田市徳田町の大森医院院長。昭和29年、同県生まれ。62歳。岩手医科大医学部卒。同大第1外科助手を経て、平成5年に父の後を継ぎ大森医院での勤務を開始。翌年、理事長に就任。高齢化の進む医療過疎地で、在宅医療や介護サービスの充実に尽力。医学生や若い医師を受け入れ、地域医療実習を行うなどかかりつけ医の育成にも力を入れている。



(宮川浩和撮影)



何気ない会話から患者の小さな変化をキャッチする

ある水曜日の午後、常陸太田市徳田町の国道349号沿いに看板を掲げる「大森医院」の大森英俊医師は、看護師1人と若手医師2人を連れて車に乗り込んだ。

目的地は、同市里美地区の笠石集落にある集会所だ。平成23年から隔週で同集落を訪れ、診察を行っている。特定の場所に複数の患者を集めて診察する「巡回診療」だ。同集落の住民は15人にも満たず、そのほとんどが65歳以上の高齢者で、1人暮らし世帯も多い。また、同集落は険しい山道に囲まれており、通院が難しい。そのため、巡回診療を始める以前は患者が通院をやめてしまい、病状が悪化するケースが多かったという。

「調子よさそうだね」「畑仕事やってるの?」

看護師らが検温や血圧測定を行う間、自らは患者との対話に多くの時間を使う。会話の中から健康状態の小さな変化を見つけることができるからだ。この日も患者一人一人の話を耳を傾けながら診察を

行っていた。

集会所の患者らは「優しくて親しみやすい、信頼できる先生」と口をそろえる。10年以上診察を受けている女性は「日々の生活について細かく指導してくれるので本当に助かっている」とほほえむ。

在宅医療の必要性を痛感

大森医院がある同市北部の山間地域は、高齢化率が40%を超えている。医療機関は大森医院を含め診療所が2カ所。専門的な治療を行う総合病院までは約30キロ離れている医療過疎地だ。寝たきりの患者や足腰が弱って通院が難しい患者も多い。そこで、外来診療や往診だけでなく、医師や看護師が定期的に患者の自宅などを訪れる訪問診療や巡回診療の体制を充実させてきた。

大森医院は大正13年、祖父が開業した。後を継いだ父がリタイアを決意した平成5年、外科医として

14年間務めた岩手医科大付属病院を辞め、39歳で地元へ帰ってきた。

「祖父や父の姿を見て育ったので、自分もいつかは帰ってくると思っていた」という一方、「外科医への未練はかなりあった」とも話す。それでも「岩手でやり残した以上のことをここでやる」と決意し、診療所での仕事を始めた。

看護師の妻と二人三脚で取り組む診察の日々。設備や薬剤の豊富さなど、大学病院とは天と地ほども差がある中、患者と懸命に向き合ってきた。そして、ある出来事が、在宅医療の体制整備を進めるきっかけとなった。

寝たきりで通院ができず、自宅で療養していた男性患者の家族から「最近調子が良くない」という連絡を受け、往診したときのことだ。熱が下がらないということで診察すると、原因は床ずれだった。長い間同じ姿勢で寝ていたため、腰から太ももにかけて血流が悪くなり、肌が真っ黒に変色していた。患部にたまった大量の膿を抜くと、腐食した皮膚から骨盤が

露出していた。男性は約1週間後、亡くなった。

「医師として、患者にこんな最期を迎えさせていいのか」。男性が亡くなった後、何度も自問した。この男性のように床ずれが原因で病状が悪化する患者ばかりでなく、風邪から肺炎を併発してしまう患者なども多かったという。こうした状況を目の当たりにして、外来診療と往診だけで対応することに限界を感じ「医師や看護師による定期的な訪問が必要だ」と考えた。

地域住民への思いが原動力

平成7年、地元の看護師を3人雇い、訪問看護を開始。これにより、患者の床ずれは激減し、肺炎なども初期段階で対処できるようになった。

さらに9年からは外来診療と並行して、自ら患者の自宅を訪ねる訪問診療を開始。午前中は外来診療、正午から訪問診療を実施し、午後3時から外来診療を再開する。休診日の木曜日は終日、訪問診



集落の集会所で行われる巡回診療の様子



親身な在宅診療は若手医師の良き手本になっている



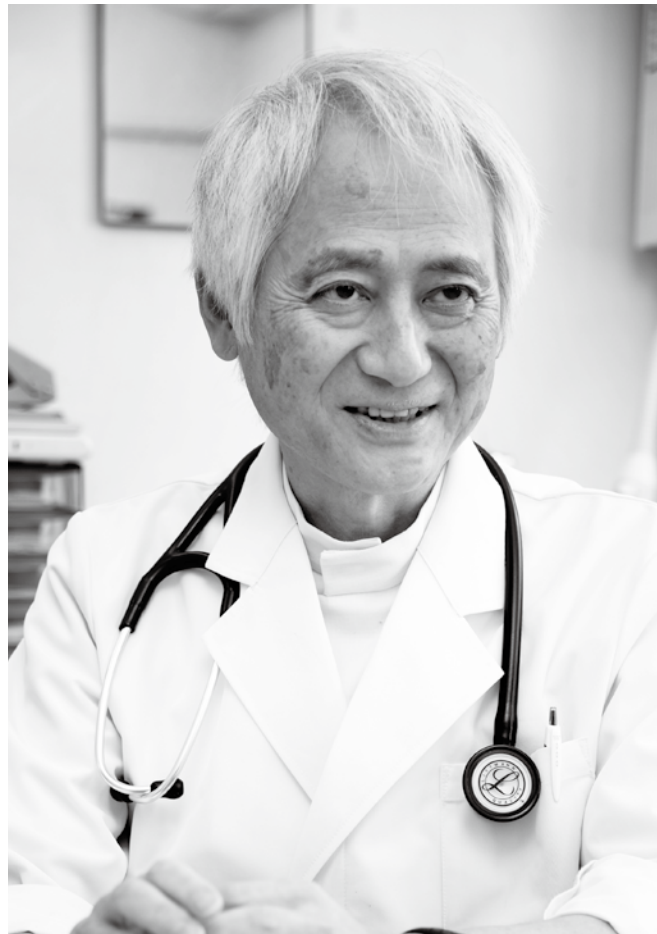
自ら設立した老人ホームでも入所者に慕われている



住民の健康を守り続ける大森医院



患者に語りかける口調はいつも優しい



患者に安心感を与えるには「知識よりも感性が大切」

療に従事した。この時期、休みはほとんどなかったという。大森医師は「忙しすぎて記憶がほとんどない」と語る。それでも「大変と思ったことはない。(訪問診療を)やらない方が大変なことになっていた」と続けた。

18年からは筑波大の医学生らを受け入れ、地域診療の実地研修に力を入れている。これまで実習に訪れた医学生は200人を超え、地域に根ざした医師の育成に努めている。診療所の拡充にも取り組み、入院施設や通所リハビリテーション施設を設置するなど、地域住民の声に応え続けてきた。

17年には社会福祉法人を立ち上げ、医療と介護の連携事業を本格的にスタートさせる。同年、特別養護老人ホーム「えみの里」を設立し、19年には通

所で介護サービスを受けられる小規模多機能施設をオープン。23年には認知症の高齢者が介護職員と共同生活を営むグループホーム「すぎの木」を立ち上げた。

大森医師は「医療過疎地では患者は医師を選べない。だから医師は患者のニーズに敏感でなくてはならない」と語る。その使命感を原動力に、「初期医療から最期を迎えるまで地元で過ごしたい」という多くの地域住民の願いを形にしてきた。

故郷で見つけたやりがい

同地域に50年以上住んでいる浅野よしさん(97)は足が不自由で、訪問診療と介護を受けている。浅野さんは「亡くなった夫が苦勞して建てた家を手放すわけにはいかない」という思いから、東京で働く息子らと離れて1人で暮らしている。不安はないかと問うと「こんなに頼れる先生がいるから大丈夫。地域の人にお世話になって、私は幸せ者」と笑

顔を見せた。

大森医師は「地域医療では、医師が身近な存在であることが大切」と語る。5年、10年のスタンスで患者と向き合うことで、求めるものが見えてくるからだという。自力で食事が取れなくなったり寝たきりになったりしたとき、どんな治療を選び、どんな最期を迎えるか。時として、家族よりも親身に患者の生き方に寄り添う。

「深い付き合いの中で、患者さんに必要なことが見えてくる。こんなやりがいはほかにはない」

大森医師は充実感に満ちた表情でそう語り「外科医としてやり残した以上のことを故郷でやれています」と笑うと、白衣を翻し患者のもとへ向かった。

(丸山将)

多言語駆使で国内外の患者から信頼

ザ・ブラフ・メディカル & デンタル・クリニック院長

明石 恒浩

[神奈川県]

あかしつねひろ 横浜市中区のザ・ブラフ・メディカル&デンタル・クリニック院長。昭和28年、東京都生まれ。63歳。比イースト大医学部卒。茅ヶ崎徳洲会病院内科勤務を経て、62年にザ・ブラフ・メディカル・クリニック(現・ザ・ブラフ・メディカル&デンタル・クリニック)院長に就任。英語やタガログ語など多言語での会話力による安心感から、外国人を中心に幅広く患者を受け付け、地元で絶大な信頼を得ている。



(宮川浩和撮影)



注射を怖がる子供には優しく励ます

ある金曜日のお昼前。横浜・山手の高台にあるクリニックの待合室では、ここが日本であることを忘れるほど、欧米人、アジア人問わず外国人が次々と訪れ、院内はタガログ語や英語、時に、仏語やスペイン語が飛び交う。

診察に訪れた英国人男性。観光で訪れた箱根から帰宅後、顔の皮膚の発疹や、かかとの痛みなどの症状が出た、と英語で説明する顔は不安げだ。しかし、明石医師がまっすぐと患者の顔を見据え、時間をかけて症状を聞き出し、病名をまとめた医学書も示しながら説明すると、最後は笑顔で診察室を後にした。

取材日は、予約者数を抑えていたというが、インフルエンザの予防接種を受けたいという母子がいれば自然に受け入れ、注射の痛み到我慢した子供には「Good Job (グッジョブ)！」とほめると、泣き顔だった子供の顔からも笑みがこぼれた。

フィリピンで医学を学ぶ

生まれは東京だが、3歳から横浜に移住。貿易商だった父親が英語で苦勞したことから、3人の兄弟を全員、山手にあったセント・ジョセフ・インターナショナルスクール(平成12年廃校)に学び、「英語はここで自然に身についた」。父が東南アジアによく仕事で出向き、欧米に行かずとも英語で医学教育が受けられると、国立フィリピン大の理系学部に進み、さらに比イースト大医学部に進学した。

特に、フィリピン大で学んだ際は、1学期の授業料が1万円未満と低額で済んだこともあり、「恩返ししたい」と思い、イースト大を卒業後、パターン半島にある同大の季節診療所で無報酬で医療に従事した。

27歳のとき、父親から帰国するよう言われたことを機に日本に帰国。ただ、フィリピンの医師免許しか

取得していなかったため、帰国後、医師国家試験予備校の公開模擬試験を週末に受けながら備えた。地元の横浜市立大学病院に勤務するイメージを漠然と抱いていたが、偶然、友人と茅ヶ崎徳洲会病院に行ったその日に「今度来られる明石さんです」と紹介され、引くに引けなくなり、そのまま徳洲会で働くことに。

昭和56年から約7年間勤務する中で、米国に留学し、当時最先端の化学療法や、抗がん剤を使った「がん研究」に没頭。帰国後「腫瘍内科」のプロフェッショナルとして活躍した。もっとも「当時はまだ、日本では根付いておらず、なかなか経験を生かすにいました」。がん治療の専門家として続けるつもりでいた今から30年前。外国人向けの病院として地元から絶大な信頼を得ていた山手病院の院長秘書から病院を引き継いでほしいと依頼を受け、悩んだが引き受けることにした。クリニックがある土地は、かつて自分が学んだセント・ジョセフ・インターナショナルスクールがあったまさに隣接地。「見えない運命

の糸に導かれているのかもしれない」とかみしめる。

コミュニケーションを重視

開院以来、「フィリピンからの密航者がずぶぬれでたずねてきたり、アルコール中毒患者も訪れる」が、「来た人はどんな人も拒まずに診療する」のがポリシーだ。時に、手持の金が少ない人もいるが、「払える金額を500円でも払ってもらえれば」とし、「必要な人に必要な医療を与えたい」と話す。

開院後は欧米人が多数を占めたが、ここ数年はアジア系の患者が6割程度を占める、という。インドや中東の方をはじめ、生活環境の厳しさからネパールやバングラデシュの方も日本に暮らしているが、その数は経済環境などにも左右され、「時代時代の流れが見える」と話す。

モニターばかり見て、患者の方を見ないで診察を終える医師が多くなったと言われて久しいが、それとは反対に、相手の表情、目をしっかりと見据え、



丁寧な触診で患者に安心を与える



流ちょうな外国語対応で患者から笑みがこぼれる



様々な質問をし、症状を詳しく探る



地域に根付くザ・ブラフ・メディカル&デンタル・クリニック



一人でも多くの患者を診察しようと多忙を極める

積極的な触診、相手の疑問に丁寧に答える。「コミュニケーションをしっかりとることがポリシー」とする明石院長の診察を受けた患者の顔は安堵（あんど）に満ちていた。

こうした考えは、徳洲会勤務時に世話になったリウマチの権威、ワグナー医師との出会いが影響している。

研修医時代、いつも言われていたのは、入院患者の病室における医師の態度を指す「ベッドサイドマナー」に関することで、診察の仕方に加え、ワグナー医師は常に「とにかくいつも落ち着いている」「患者に対し、紳士であれ」「イライラしたら笑え」と繰り返し教えたという。ある日、当直に入り、仮眠をとっていると、朝4時半にワグナー医師から「すぐに来なさい」と電話。行ってみると「ごらん。日の出だ」と。思わず拍子

抜けしたが、ワグナー医師の感性に感動したという。

「夕食を終えて、午後10時から午前2時くらいまで、外国人患者らからの問い合わせのメール対応などをしている。一銭にもならないけれど」と苦笑する。それでも続けるのは、患者の笑顔や感謝の言葉があるから。「開業時から30年来通ってくれている90歳代の女性がいる。別の病院で問題ないと診断を受けた方だったが、不整脈の状況からペースメーカーを入れる必要があると診断し、今でもお元気に通院していただいております、折に触れて感謝していただいている」という。

社会貢献活動にも注力

クリニックだけでなく、NPO法人「MICかながわ」

が主催している、在日のフィリピン人が医療機関にかかる同じフィリピン人らのために行う医療通訳ボランティアの勉強会に、医療用語や病気についての講師として年に数回だが、多忙の中駆け付ける。参加者は「母国語（タガログ語）と日本語、英語を使い、体や病気の働きや動きを教えてくださいのおかげで、自然に、わかりやすく説明や通訳ができる」と喜ぶ。

明石医師も、「授業という感覚ではなく、明日から役に立つような時間になっている。皆さんとの会話は楽しいし、自分にとってもプラスになる」と語る。院外の社会貢献活動にも積極的に関わることが、医療への取り組みの充実につながっている。

当面はクリニックを守るが、後継者が見つければ、「元気なうちに、恩返しも含めて、フィリピンや他の発展途上国で医療に関わることも考えたい」と意気込む。

（那須慎一）



常に患者第一で診察にあたる

都会の医療の隙間をうめる

大森医院院長

大森 浩二

〔京都府〕

おおもり・こうじ 京都市南区の大森医院院長。昭和31年、京都市生まれ。60歳。京都府立医科大医学部卒。同大学付属病院第2外科助手や府立与謝の海病院（現・府立医大付属北部医療センター）外科副院長などを経て、平成8年に大森医院を継承。多職種と連携した在宅医療に取り組み、患者や家族に寄り添う在宅での看取りも実践する。



（寺口純平撮影）



往診先では患者が気づくほど腰が低い

JR京都駅からひと駅の距離と、京都市の都市部にある「大森医院」（同市南区）。院長の大森浩二医師は、往診用のかばんを提げて日々、自転車でまちを駆けている。途中、患者や家族に出会うことも少なくない。「寒うなりましたね」。穏やかな笑顔で声をかけると、「実は父の具合が悪いです」などと言葉を返してくることもある。

こうした会話で、患者らの状況を知ることができることもあり、医院の近くはなるべく自転車で往診するよう努めている。

地域に医療機関は多いが、医療環境が充足しているとはいえない実態があった。社会問題化している「老老介護」や「認認介護」だけでなく、独居高齢者や末期がん患者ら、すぐ近くの医療機関に満足に通えない人も少なくない。

「都会では近隣とのかかわりが少ない分、周囲の人の目が届かないことも多い。医療のスペシャリストはたくさんいても、そこにたどり着けない人もいる」

高齢化が進む中、往診の需要は増し、多いときで

1日に5人ほどの自宅を訪ねている。二十数人いる往診患者のうち約半数が独居高齢者だ。

疾患だけでなく人を診る

ある金曜日の昼過ぎ、介護ヘルパーのケアを受けながら1人で暮らす女性（89）宅を訪れた。「寒うなりましたが、大丈夫ですか。夜は寝られますか」「お昼ごはん、今日は何だったん?」。ベッドに座っていた女性と視線を合わせながら、ゆったりとした口調で話しかける。手や指、足と丁寧に一つ一つ触診すると、女性の表情が和らいでいった。

「お肌もつやつややし、達者で生きられますわ」と弾む声で言うと、30年近く年の離れた女性が「親に会ったみたいにほっとしますわ」と笑った。

医院の近くに住むこの女性は最近までタクシーで通院していたが、歩くのが困難となり往診を求めた。こうした都会にある医療の隙間を埋めるべく、地域のかかりつけ医として地道な診療を行っている。

在宅での医療の質を向上させるには、中でも食事が重要と考え、自身が窓口となり都会の“資源”を活用。歯科医や薬剤師、管理栄養士ら多彩な職種と連携して行う「地域包括ケア」をいち早く実践した。

退院後に食事がおろそかになり鬱状態に陥ったが、管理栄養士が自宅を訪れて食事管理をすることで笑顔を取り戻した患者もいる。入れ歯を長年入れたままで食事を満足にとれなくなっていた高齢患者宅には歯科医が訪問。患者自身は食べる喜びを再び味わうことができ、家族からは「きれいな姿で看取ることができた」と感謝を告げられた。

チームとして患者の生活そのものにかかわり、家族ともに心穏やかに過ごすことができるように努めることが、主治医としての役目と考えている。



やわらかなまなざしで患者と対話する

主治医の熱意が患者を救う

大森医院は昭和30年、外科医だった父親が開業。病院とともに育ち、老若男女問わず地域に住む患者がすぐ身近にいる環境が当たり前だった。物心ついたころから、父の背中を追いかけて医師になる道を選んだ。

父親の代からの患者は高齢になり、子供や孫もかかりつけとなっており、家族全員の健康を預かっている。

約20年前に医院を継ぐまで、大学病院の消化器外科医として第一線で最新の技術を磨いてきた。医師としての歩み方は大きく転換したが、「主治医の熱意が患者を救う」という信条は変わらない。

勤務医時代と異なり、幅広い疾患に対する知識を求められたが、多岐にわたる疾患に総合的・全人的に対処する専門医となるため、「日本プライマリ・ケア連合学会指導医」の資格を取得。地域の潜在力も掘り起こそうと、地元医師会「下京西部医師会」に「プライマリ・ケア教育の会」を設立し、約2年半前から2カ月に一度、30人ほどの医師と勉強会を開いている。

平成23年に発生した東日本大震災では、JMAT（日本医師会災害医療チーム）の京都府医師会の第1陣のリーダーとして福島県会津若松市に赴き、避難者の状態を診て回った。昨年の熊本地震の際も、発生直後に被害の大きかった熊本県益城町を訪問。避難所を訪れて医療ニーズの掘り起こしに努めた。

このとき、医院を守っていたのは医院内で耳鼻咽喉科を診療して



専門性を高め患者の負担を減らす



診療連携カードシステムを構築し膨大な医療情報を共有



京都市の都市部にある「大森医院」



診察するうち患者の表情がやわらいでいった



「変わらぬ熱意に頭が下がる思い」。ともに歩む妻と患者の健康を守る

いる医師の妻、敦子さん(57)だ。「普段の診療も被災地の活動も、家族のサポートがないとできない」と感謝の気持ちを忘れない。

目線を合わせて対話

被災地での活動で必要性を改めて認識した一つは、19年から地元医師会で取り組んできた「診療連携カードシステム」だった。患者の疾患名や薬剤アレルギー、使用薬剤名などが閲覧でき、災害時や緊急時でも切れ目のない医療情報の共有化が可能な仕組みで、今後、採用地域を増やしていきたい考えた。

また、約2年半前からは地元医師会の医師14人で「看取り当番」制度を開始。土・日曜日や祝日に当番を決めて、出張などで医院を離れている際、それぞれの患者の容体が急変しても対応できるようにしている。ただ、これまで一度も出動したことはない。「主治医がみな熱心で、患者の状態が危ないと思

うと、出張先からとんぼ返りしたり、どこにも行かなかったりで」とはにかむ。

「先生に看取ってほしい」。患者や家族の信頼を受け、自宅での看取りを希望されることも増えたことは、「医者冥利に尽きる」と言い切る。ただ、患者本人と家族の意思が相反することもあり、ともに尊重しながらの医療の選択は困難を極める場合もある。そうしたとき、自身の父親を自宅で看取ったときの経験が支えになっている。

仕事一筋で、偉大な存在だった父親が肺がんを患い、体は痛く、呼吸さえもつらい状態となり、最期の4カ月ほどは動くこともままならなくなった。「患者さんが親を看取るときの気持ちがよくわかる。自然と寄り添えるようになった」。

患者の訴える言葉や家族の思いに熱心に耳を傾ける。そうして、目線を合わせて“対話”する姿勢から、みな納得が生まれる。「頼れる慈父のようでありたい」。今日も患者にやわらかな顔で向き合う。

(山崎成葉)

島民の「最後の砦」守り38年

薩摩川内市下甕手打診療所 前所長

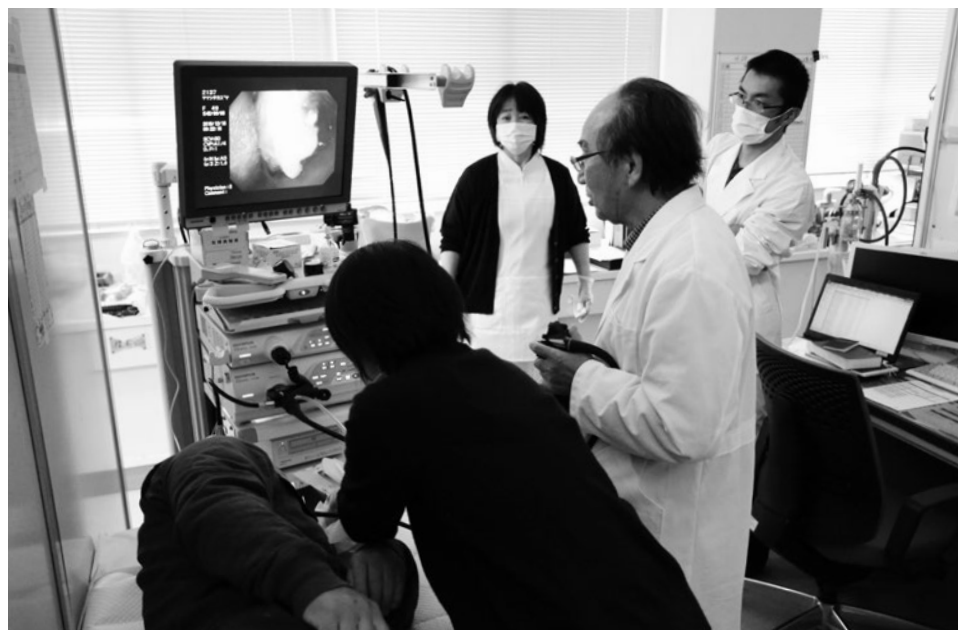
瀬戸上 健二郎

[鹿児島県]

せとうえ・けんじろう 鹿児島県薩摩川内市下甕手打診療所前所長。昭和16年、同県東串良町生まれ。75歳。鹿児島大医学部卒。鹿児島大第1外科、国立療養所「南九州病院」勤務を経て、昭和53年から平成28年9月末まで同診療所所長。離島・僻地医療の充実と向上に精力的に取り組む。離島医療をテーマにした漫画・ドラマ作品「Dr.コトー診療所」のモデルになった。



(永田直也撮影)



のどに魚の骨が刺さった患者を診る瀬戸上医師

東シナ海に浮かぶ離島、甑島。海から昇る太陽に照らされ、さまざまな色に光輝いたことから古くは「五色島」と呼ばれた。列島南部に位置する下甑島は鹿児島県薩摩川内市の川内港から沖合約50キロにあり、人口約2300人。島へのアクセス手段は船しかない。

下甑手打診療所は、その島の最南端、港を見下ろす高台にある。島民でもある瀬戸上健二郎医師（75）は同診療所で昨年9月末まで所長を務め、今も精力的に診療に奔走する。

診療時間（午前9時開始）前の8時半ごろ、素足にズック靴で出勤してきた瀬戸上医師はスリッパ代わりの〆わら草履、に履き替え、白衣に身を包む。「島のわら草履作り名人が作って届けてくれる。気持ちいいんだ」と笑顔で語る。

診療所2階の病室を回診する。ぜんそく持ちで肺炎を起こしたという島の83歳のおばさんはこの日が退院日。瀬戸上医師が声をかけると、息子さんを交えて投薬についての相談。「良い先生よ。もう何十年の付き合い。何のお礼もばせんと、申し訳なから」と照れ笑いだ。「何もお礼なんかいらんよ」と瀬

戸上医師が温かく退院を見守る。

1階診察室では、後任所長を務める内村龍一郎医師（52）らとともに外来診療もさばく。訪れてくる患者は多彩。漁師町ならではの「のどに刺さった魚の骨が取れない」という男性患者や、糖尿病患者、風邪をひいた人。「驚いたのはウミガメにかまれて大けがをした患者も治療したことがある」と話した。

離島・僻地医療に従事して38年。人気漫画・ドラマ「Dr.コトー診療所」の实在のモデルでもある。「（病巣を）自分で見つけ、麻酔をし、手術をしてきた。それを支えたのは地域住民との信頼関係であり、理解があったからこそできた」

医師に助けられ医学の道へ

大隅半島・東串良町の農家に生まれた。医師を志したのは県立志布志高校3年生の時、医師に助けられた体験。盲腸の手術を受けたが、術後1週間が経過しても立って歩けずに、貧血を起こして倒れたという。

「何が起きていたのか？恐らく虫垂動脈がうまく、く

つついていなかったのだろう」。別の病院へかかり、セカンドドクターに診てもらおうと、腹部にバケツ1杯ほどの内出血があった。完治まで3カ月かかったが、仲良くなった医師に進路を相談したところ、弁護士か医者を目指められた。猛勉強し、東北大学法学部と鹿児島大学医学部に同時合格、迷いを断ち切った決め手は「医者の仕事はおもしろいぞ」の一言だった。

進学した鹿児島大では第1外科へ入局。胸部外科の研究と臨床に没頭した。

インターン時代の昭和41年、初めて離島医療との接点ができる。奄美大島の住用村（現・奄美市住用町）の診療所へ約2週間赴任。「まだまだ医者として経験未熟。怖くて（時間が）長かったように感じた」。そして「恐怖、のお産患者を診る羽目になったが、助産師資格を持つ看護婦のサポートで切り抜かれた」。

鹿児島大から国立診療所「南九州病院」（始良市）へ移り、外科医長まで務めた。しかし、独立開業を目指し病院を辞めたのが大きな転機となった。下甑村から「半年だけでもいいから来てほしい」と頼まれた。昭和53年、妻（68）を連れ下甑島へ赴任した。

離島医学の最前線へ

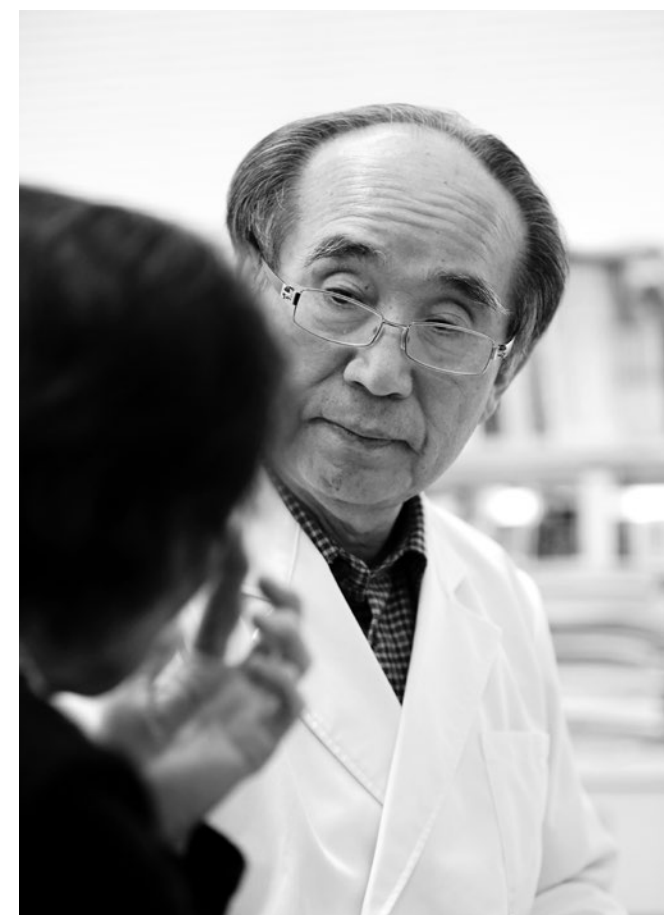
赴任した当初の診療所はウミガメが産卵に上陸する砂浜の前にあった。当時、医師は自分だけで、看護師と事務員2人ずつの5人体制。病床は6室あったが、手術台はさび、麻酔機もなかった。島で手術ができるか住民も不安だった。本土の病院で多くの手術をこなしてきたベテランの瀬戸上医師でも手術を断られた。「島へ赴任したことは大歓迎だが、それはイコール信頼ではない。信頼関係は容易に築けるものではなく、実績を示しながら、時間をかけて作り上げ

ていくしかなかった」と振り返る。

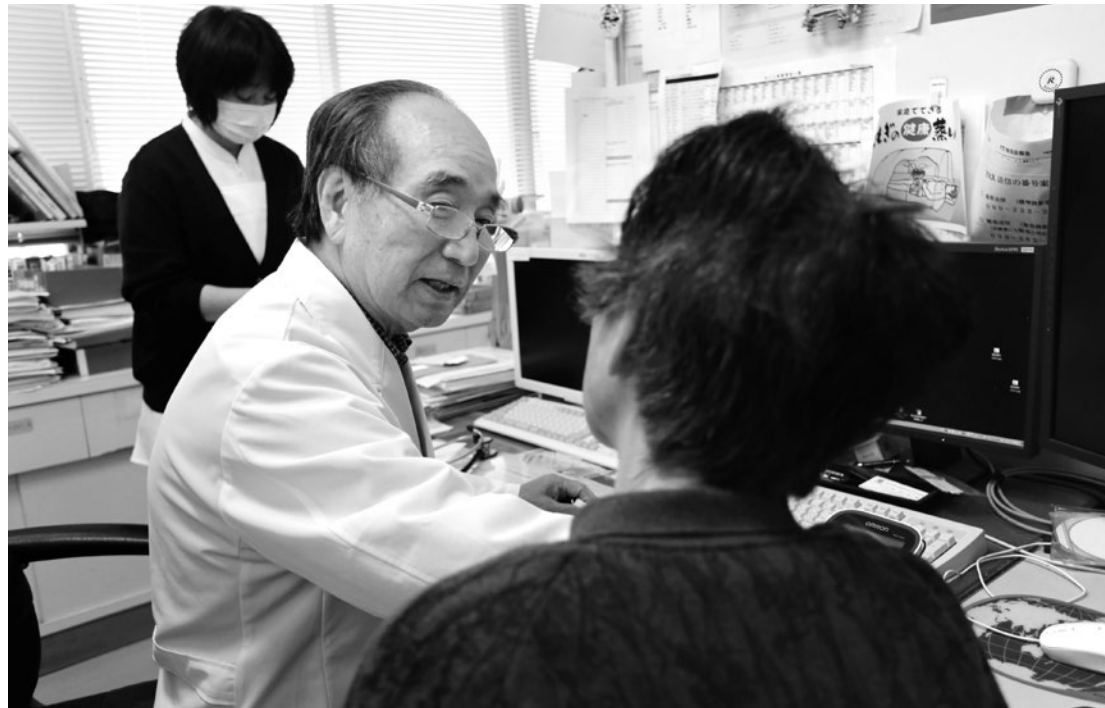
行政の支援を得て、不十分だった設備やスタッフの拡充に努め、昼夜を問わず離島医療の最前線で奮闘した。簡単な盲腸の手術から、得意とする肺がん手術以外に、島で勉強しながら帝王切開、人工股関節やペースメーカーの挿入や植え込みなどを習得、仲間の医師と協力し難しい腹部大動脈瘤手術も成功させた。

昭和61年に新築移転した現診療所には人工透析室を配置し、CT（コンピューター断層撮影）機器も導入。病床数は19床に増え、医師2人と看護師13人を含むスタッフ29人がいる。

「当初半年だけのつもりだったが、気がつけば38年過ぎていた」のが実感だ。理由を聞かれると、「何でもあるの地域医療のやりがいとおもしろさを知った



実績を積み上げ、島民の信頼を得てきた



「当初半年のつもりが、気がつけば38年過ぎていた」と語る

から」と答えるが、「悔しい、情けない思いもいっぱいしてきた」と話す。それでも続けられたのは、島とそこに暮らす人々の魅力。島民の「最後の砦」を守り、千人以上看取った。

その姿は無医村の島に赴いた医師の活躍を描く「Dr.コトー」そのもの。瀬戸上医師が国保の刊行物や地元紙で連載したエッセーが好評となり、漫画家の山田貴敏さん(57)の取材も受け作品に生かされた。

離島医療の先進地へ

甑島を離島医療の先進地とすべく昭和59年から「甑島地域医学研究会」を開催。全国から若手医師らの研修を受け入れ、JICAを通じて海外からも研修医を迎える。若手医師に教えられることも多く、同診療所はさながら「協働共学」の場になっている。

「離島医療のマンパワー不足解消にも役立っている。離島生活では、(死亡診断書を出せる)医師がいなければ、葬式も出せなくなる。島の人は先生を『瀬戸上(神)さん』と慕っている」と診療所事務長の尾崎孝一さん(56)。

昨年10月、鹿児島市の内村医師が後任の所長として就任し、瀬戸上医師も当面、診療所勤務を続け、相談役としてサポートすることになった。瀬戸上医師は薩摩川内市市民福祉部次長にも就任しており、下甑島を含む甑島列島の診療体制に関し助言する立場だ。

診療所の待合室には、漫画家の山田さん直筆による「Dr.コトー」主人公のイラストが、優しい目をして患者たちを見守る。そのまなざしはどこか瀬戸上医師と似ていた。「Dr.コトー」から「赤ひげ」へ。離島医療に情熱を傾ける下甑島のDr.コトーに最終回はない。

(谷田智恒)



診療所は島の最南端、港を見下ろす高台にある



島民の「最後の砦」でもある下甑手打診療所



設備やスタッフの拡充に努めてきた



人工透析など島の医療は格段に向上した

日本医師会 常任理事

道永 麻里



大賞受賞者の皆様、おめでとうございます。

第5回「日本医師会 赤ひげ大賞」の選考経過のご報告並びに講評を述べさせていただきます。

第5回「日本医師会 赤ひげ大賞」の選考につきましては、昨年5月16日、日本医師会より都道府県医師会宛てに推薦依頼文書をお送りし、20の医師会から総勢23名のご推薦をいただきました。

選考に当たりましては、先ほどご紹介のありました9名の選考委員で審査を行い、その結果を基に、10月12日、日本医師会館で選考会を開催させていただきました。

その後、11月30日に、今回の結果を公表し、本日の表彰式を迎えるに至りました。

引き続き、選考の講評を述べさせていただきます。

各都道府県医師会よりご推薦をいただきました23名の先生方はすべて、本賞に値する素晴らしい活動を地域で続けてこられた方々ばかりであり、選考には困難を伴いましたが、その中で特に選考委員の目を引きつけたのが、今回受賞されました5名の先生方でありました。

無医村に赴任して長年、地区唯一の医師として住民の健康保持に尽力されている秋田県の下田輝一先生、交通手段の少ない地域において、在宅医療の環境を整備されてきた茨城県の大森英俊先生、多言語を駆使して診療を行い、外国人の患者さんに安心を与えておられる神奈川県の実明石恒浩先生、多職種と連携して往診を行い、都会の孤独な患者さんを支えておられる京都府の大森浩二先生、35年にわたり離島・へき地医療の充実と向上に尽力されてきた鹿児島県の瀬戸上健二郎先生は、病気だけではなく、患者さんやそのご家族が暮らしている地域まで診ておられ、まさに医療でまちづくりを実践する現代の赤ひげ先生の心意気に大変感動いたしました。

本賞が、地域医療に従事する先生方の励みとなり、地域医療の充実へとつながることを願っております。

ありがとうございました。

平成29年度

第6回「日本医師会 赤ひげ大賞」

● 推薦概要 ●

日本医師会

赤ひげ大賞

主 催	日本医師会、産経新聞社
後 援	厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
対 象 者	病を診るだけではなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日医・都道府県医師会役員は除く）。
推薦方法	本賞受賞にふさわしいと思われる方（原則1名以上2名以内）を各都道府県医師会会長が推薦
受賞発表	産経新聞紙上
選 考	日本医師会と産経新聞社の主催者側委員に第三者を交えた選考委員会において選定
賞状と副賞	賞状、記念盾および賞金

力をあわせて、未来を守る

ワクチンによる予防こそが、
これからの医療の中核になる。
ましてや感染症の予防は、
ひとりを守るだけでなく、
その周辺の人々、ひいては社会や、
この国そのものを守ることになる。
そう信じる私たちは、新しい時代に向かって、
力強く歩み続けていきます。



ジャパンワクチン株式会社

japanvaccine.co.jp